

子育て支援を入口にしたJAの新しい仲間づくり に関する一考察

—JAみどりの涌谷支店の活動を手がかりにして—

一般社団法人 JA共済総合研究所
調査研究部 研究員

ふく だ
福 田 いずみ

アブストラクト

少子化対策・子育て支援の必要性が叫ばれる中、地域の中では様々な担い手による子育て支援が実施されている。JAにおいても、地域の次世代支援を目的として「子育て支援センター」の運営や「子育てひろば」などを実施し、地域の子育て支援に参画している。

本稿では、JAの子育て支援の取組みの中から、宮城県のJAみどりの涌谷支店において、平成22年度から女性部の協力を得て実施している子育て支援「PIKAPIKAママくらぶ」の取組みが、JA女性部員の新規加入へとつながった事例について報告する。

具体的には、実践内容をはじめ、地域の子育て支援の中での位置づけや特徴について述べるとともに、この活動を通して生まれた参加者とJA女性部との関係性について報告する。また、参加者のひとりに行った半構造化インタビューの結果を「複線経路・等至性モデル（TEM）」の手法を用いて分析し、JA女性部に加入するまでの心の動きを可視化し、JAの子育て支援の新たな仲間づくりに関する効果と課題について考察を行う。

（キーワード） 次世代対策 JA女性組織 子育て支援

目次

- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| 1. はじめに | 5. JA女性部に加入するまでの道のり—TEMを用いた分析から— |
| 2. 「PIKAPIKA ママくらぶ」の活動 | 6. JAの子育て支援活動と新たな仲間づくりの効果と課題 |
| 3. 地域における「PIKAPIKA ママくらぶ」の位置づけ | 7. おわりに |
| 4. 活動を通して生まれた参加者との関係 | |
-

1. はじめに

子育て支援というと、広義には労働者の子育てを支援する各種労働制度や保育所などの保育事業も含まれるが、狭義には地域の在宅子育て家庭への支援を示す場合が多い。

地域の在宅子育て家庭への支援（以下、地域子育て支援）は、大家族での生活や緊密な地域関係によって子育てが支えられていた時代には、その必要性がそれほど感じられてはいなかった。しかし、現代ではそれらの支えが少なくなり、社会全体で地域子育て支援に取り組む必要性が認識されるようになった。

地域子育て支援の活動は、現在のような支援の制度がなかった時代、子育ての当事者や地域のニーズに気づいた有志が自発的に始めたものが原点となっている。そのようにしてこれまでに各地で多くの先駆的な子育て支援に関する活動が展開されてきた。

福祉事業の多くが献身的な民間の活動が先にあって、後にそれを自治体や国が制度化し、補助金を出すなどして公営の事業を立ち上げてきた歴史を持つが、子育て支援に関しても例外ではない。

現在は、国の制度として地域子育て支援拠点事業があり、子育てひろば等の様々な類型の子育て支援制度が設けられているが、それらの適用を受けず、地域の支援ニーズを捉えた民間活動として独自に行われている子育て支援も数多く存在する。

都市部に比べ大家族の暮らしが残っているといわれる農村部においても、過疎化や少子化の進行などで母親同士、そして就園・就学前の子ども同士のふれあいの場や機会は減少

している。本稿では、このような農村地域の実情に対応し、子育て支援活動を続けてきた結果、集まってきた若い母親たちをJA女性部の加入につなげた取組みに関する調査・研究結果を報告する。

本研究を通して、JAの子育て支援活動が次世代の組合員である農家のお嫁さんと地域の若い母親をつなぎ、さらには、JAとのつながりを育んでいくためにはどのようなことが必要なかを明らかにしていく。

なお、本稿の構成は以下のとおりである。まず、第2節においてJAみどりの涌谷支店の実践事例を報告し、第3節では、地域におけるこの活動の位置づけや活動の特徴について述べていく。続いて第4節では、活動を続けたことによる効果などについて報告する。第5節では、参加者のひとり（農家のお嫁さん）に対して行った半構造化インタビューのデータを複線経路・等至性モデル（TEM）の手法を用いて分析し、JA女性部に加入するまでの心の動きを可視化し、加入の動機づけとなった要素について考察を行う。そして第6節においてJAの子育て支援と新たな仲間づくりの効果と課題について考えていく。

2. 「PIKAPIKAママくらぶ」の活動

JAみどりの涌谷支店において実施している「PIKAPIKAママくらぶ」は、JAみどりの女性部・涌谷支部のメンバーがJAの担当者とともに平成22年度から継続実施している子育て支援活動である。

平成26年度で5年目を迎えたこの活動は、他の地域から嫁いできた農家のお嫁さんが子育て期に孤立しがちであることを知ったJA

女性部員の、「子連れで気楽に集まって交流できる場を作ってあげたい」という思いを実現したものである。

（１）概要

「PIKAPIKAママくらぶ」の活動は、実施要領を図表１のとおり定め、毎年５月に開講し、翌年の２月ごろまでの間に概ね６回の講座を実施している。

活動日には、ＪＡみどりの女性部・涌谷支部の子育て支援メンバー^１と、支店のふれあい係の担当者が連携して実施している。また、プログラムの関係上、応援の必要性が生じた際は、同支店の職員がサポートする体制をとっている。

利用者の登録人数は、現在１４名である。

（２）活動方法

この活動の開催時間は、最後のおやつタイムを含め、通常１０時から１３時くらいまでである。

活動場所には、主にＪＡみどりの涌谷支店

写真１ 保育の様子（奥ではママたちが調理実習中）



の２階にある会議室が使用されている。広い会議室のワンフロアを料理や手芸を学ぶ母親のコーナーと、保育を受ける子どものコーナーに分けて、ひとつの空間の中でいつでも親子がお互いを確認できる状況を作っている（写真１）。こうすることによって子どもたちは不安を感じることなく過ごすことができ、母親たちも安心して講習を受けられる。

しかし、事務用の会議室を使用しているた

（図表１）PIKAPIKAママくらぶ実施要領

1	目 的	このくらぶは、地域に住む子育て中の若い母親を対象に、子育ての支援の場を設け、母親達の自分磨き、また仲間（友達）づくりなど生活を充実させ、ＪＡ事業に理解を深め、若い世代とＪＡをつなぐことを目的とする。
2	名 称	この名称は「PIKAPIKA ママくらぶ」と称する。
3	主 催	このくらぶの主催はみどりの農業協同組合涌谷支店とする。（子育て支援の担当は、みどりの農業協同組合女性部涌谷支部とする。）
4	対 象 者	①涌谷地域に在住する２０～３０代の母親とする。②定員については、１０名とする。
5	参加負担金	参加費は毎回材料費として３００円～５００円程度をいただく。
6	開 催 期 間	内容は、生活・健康・食育・地産地消などに関して知識高揚を図るものとし、年６回の開催とする。
7	事 務 局	事務局は、みどりの農業協同組合涌谷支店ふれあい係に置く。
8	経 費	経費の支出は、参加負担金の中からとみどりの農業協同組合涌谷支店生活指導の文化活動費より支出する。

（出所）みどりの農業協同組合涌谷支店「PIKAPIKAママくらぶ実施要領」より転載

１ ＪＡ女性部・涌谷支部における子育て支援サポーター。登録人数は９名（平成２７年２月現在）

め、調理実習や手芸などの講習を行う際は、様々な工夫をこらし対応している。

調理実習の時には、女性部のメンバーやJA職員等が事前に食材の下準備をしたり、内容に応じて卓上電磁調理器やホットプレートを使用するなどして、母親たちの学びを支えている。

また手芸講座の際には材料の下準備だけでなく、ミシンが必要な場合は女性部のメンバーが自前のミシンを持ち込む等して、作品が最後まで完成できるよう熱心にサポートしている。

子どもの保育に関しては、各自で遊びたい玩具を各家庭から持参し、帰りには持ち帰るシステムを取っているため、JA側で用意・管理する物はフロアマットと少量の玩具程度となっている。この活動のため大きなコストや管理の手間をかけず非常に合理的に活動すすめている。

(3) 実施内容

平成22年度からこれまでに実施された活動の内容は、図表2のとおりである。

その5年間の実施内容を見ていくと、手芸や料理などの母親の学び・交流とともに季節の行事や工作など、親子が一緒に楽しめるプログラムとなっている。ほとんどの講座は、その分野に関して心得のある女性部のメンバーが担当しているが、内容によっては、専門講師に派遣を依頼する場合もある（次頁写真2）（次頁写真3）。

母親が手芸や料理の講座を受けている間の子どもたちの保育は、元保育士や子育て支援に関する研修会の受講経験を持つ女性部のメ

(図表2) PIKAPIKAママくらぶ開催講座内容

22年度	
実施月	実施内容
5月	開講式 「手作り絵本の読み聞かせ」「育ててみようミニトマト」
7月	「石鹸作り」「布絵本作り①」
8月	「ベビーマッサージ教室」「布絵本作り②」
10月	「手作りデザート教室」「布絵本作り③」
1月	「米粉スイーツ作り」「布絵本作り④」
3月	閉講式 「布絵本を完成させよう⑤」 修了ランチパーティー

23年度	
実施月	実施内容
6月	開講式 「米粉を使ったピザ作り」
8月	七夕飾りづくり
10月	手袋人形づくり
12月	クリスマス会「クリスマス絵本の読み聞かせ」 「ケーキデコレーション」
2月	閉講式 「読み聞かせ・手袋人形の使い方を学ぼう」 「ひなまつりランチ」

24年度	
実施月	実施内容
5月	開講式 「米粉を使ったアップルパン作り」
7月	七夕・スイカ割り
9月	「通園バッグ作り」
11月	「手袋人形の遊び方、絵本の読み聞かせ勉強会」
12月	クリスマス会 ケーキデコレーション
2月	閉講式 キャラ弁づくり

25年度	
実施月	実施内容
5月	開講式 「親子でお城山ハイキング」「育ててみようミニトマト」
7月	「ゲームとリズム遊び」「スイカ割り」
9月	「米粉クッキング」
11月	「クリスマスのタペストリー作り」
12月	「親子クッキングフェスタへの参加」
2月	閉講式 ひな祭り飾り巻き寿司 修了ランチパーティー

26年度	
実施月	実施内容
5月	開講式 「親子でトマト狩り」&育ててみようミニトマト（進呈）
7月	「ミニミニ運動会」「スイカ割り」
9月	「マカロンケース作り」
11月	「米粉クッキング」
12月	「手作りマラカス&クリスマス会」
2月	閉講式 「親子で米粉ピザ作り&修了ランチパーティー」

(出所) JAみどりの『PIKAPIKAママくらぶ開催講座内容』より筆者作成

写真2 フードコーディネーターを招いて
「巻きずしづくりの講習」(平成26年2月)



写真3 JA女性部員による
「マカロンケースづくりの講習」
(平成26年9月)



写真4 元保育士の女性部員による読み聞かせ



写真5 集いの最後のおやつ「コミュニケーションタイム」



ンバーが担っている(写真4)。

特に元保育士は、その豊富な経験や専門性を活かして、子ども向けのプログラムの考案やイベントの進行など、保育に関するリーダー的な役割を担っている。このようにして「PIKAPIKAママくらぶ」の活動は、JA女性部のメンバーの持つ得意分野や経験、専門性を活用しながらすすめられている。

また、毎回の講習の後にお茶とともに提供されるJA女性部のメンバーによる手作りおやつや果物、漬物等をいただきながらの歓談の時間は、JA女性部のメンバーと参加者である地域の若い母親たちとのコミュニケーションの場となっている(写真5)。

3. 地域における「PIKAPIKAママくらぶ」の位置づけ

5年もの間活動を続けてきた「PIKAPIKAママくらぶ」は、地域の子育て支援の中でどのような位置にあるのか。ここでは公的な制度との関係と活動の特徴について述べていく。

(1) 公的な制度との関連

現在、「PIKAPIKAママくらぶ」の活動が行われている基礎自治体、涌谷町における子育て支援事業には、平成17年度から実施している地域子育て支援拠点事業（私立涌谷町保育園）がある。そして、平成22年度～26年度を計画期間とした「涌谷町・安心子育て支援プラン（涌谷町後期行動計画）」²においては、地域の子育て支援を多様な機関や民間団体等が連携して行うことが描かれている。

涌谷町ではこの計画にのっとり、後期計画が開始した平成22年から宮城県の子育て支援コーディネーター養成事業に有志住民を派遣しており、現在その受講者が子育て支援サークルを立ち上げるなどして地域の中で活動している。（『PIKAPIKAママくらぶ』で活躍しているJA女性部のメンバーの中にも、受講経験者あり）。

そして、地域の子育て支援活動の内容としては、一般的には次のようなものが想定されている。

- ① 「ひろば」などの交流の場の提供
- ② 子育てサークルの支援
- ③ 子育てに関する相談・援助

- ④ 子育て・子育て支援に関する講習等
- ⑤ 地域の子育て支援サービスについての情報提供
- ⑥ 一時預かり 他

これらの活動を保育所、NPO法人、個人など様々な担い手が行っており、活動内容に関しても、総合的にあらゆるメニューを備えるものから「ひろば」（交流の場）的な活動のみを行うものまで多様である。活動の頻度に関しても毎日活動しているものもあれば、年に数回のみ活動するものもあり、それぞれの事業主体の規模や特性に応じた形で行われている。

国の地域子育て支援拠点事業の対象となるためには、上記の⑥以外の機能を備え、最低でも週3回、一日に5時間以上開設されることが求められる。（⑥は、地域子育て支援拠点事業とは別に、一時預かり事業として制度化されている）。

これをクリアするためには、専従の職員や施設設備が必要となり、地域の小さな活動にとってはかなりハードルが高い。さらに、これらは国の補助を受けて行う市町村の事業であり、市町村が事業の必要性を認め、予算を確保することが前提となる。

そのような理由から、有志による活動等ではそこまでの形を求めず、身近な地域の人々のニーズに柔軟にに応じていく小さな活動を選択することになる。「PIKAPIKAママくらぶ」の活動もこれに該当する。

2 http://www.town.wakuya.miyagi.jp/gyose/kekaku/documents/project_kosodate.pdf

(2) 「PIKAPIKAママくらぶ」の特徴

「PIKAPIKAママくらぶ」の活動は、上記3(1)の①④に該当する内容をイベント的に行うという限定的な活動内容であり、継続的に設置される地域子育て支援事業とは目指す役割も異なる。毎週数日以上設けられる継続的な子育て支援の場では、一定の専門性を帯びた相談・援助や、様々な支援制度に関する情報提供などの活動も視野に入ってくる。

一方、「PIKAPIKAママくらぶ」は、「子連れで気楽に集まれる場の提供」「子育て中の母親の学びの場」という目的にそって計画的に準備された充実感ある活動を定期的に行い、「母親の心にひとときの安らぎをつくる役割」や「子どもたちが元気いっぱい活動できる機会を提供する役割」そして「子育てをする親同士をつなぐ役割」を果たしている。

この地域には、他にも有志による子育てサークルが存在しているが、「PIKAPIKAママくらぶ」の参加者へのヒアリングでは、特に農家のお嫁さんから「活動がちょうど自分に合っている」、「この程度の頻度なら参加しやすい」という声があがっている。そこには、自分のことで出かけることに対する家族への遠慮といった核家族とは異なる農家のお嫁さんの事情が垣間見られる。そのような中でこの活動は、「JAに行ってきます」と言えば親世代にも理解してもらえ、説明のいらない外出先という価値を生み出しており、農村の子育ての閉塞感の解消の一助となっている。

また、地域子育て支援の多くが支援の対象を就学前の子どもと親に限定しているが、この活動は子どものケアというよりも「母親同士の交流と学び」に重点を置いているため、

子どもが幼稚園や学校に入ったので終了ということではなく、引き続き母親のみで参加することを奨励している点が最大の特徴といえよう。

子育てをする親にとって、地域の子育て支援は身近な場所で行われていることが必要であり、また、お互いの顔が見える小さな規模のものに参加しやすさを感じる人も少なくないのではないだろうか。その意味においては民間の様々な子育て支援活動が存在することが、地域の子育て環境を豊かにしていくと考える。

ただし、小さな活動といえども、良質な活動を維持継続していくためには組織的な支援が必要な場面も多い。この活動がJAの支援により支えられ、結果として涌谷町の地域子育て支援の一端を担う活動を継続できていることの意味は大きいといえよう。

4. 活動を通して生まれた参加者との関係

「PIKAPIKAママくらぶ」は、活動を開始してから丸5年が経った。平成22年5月の時点では、わずか6組の親子の参加から始まったこの取組みも、口コミやJAの広報誌からの情報発信等によって参加者が徐々に増え、現在は14組となっている。そして、その多くは継続参加者である。

ここでは、この活動を続けてきたことで生じた参加者とJA女性部の関係について述べていく。

(1) JA女性部がつくる子育て世代の交流の場

「PIKAPIKAママくらぶ」は、J A独自の取組みであるため、行政の子育て支援の情報ツールには載らないインフォーマルな活動であるが、最初からJ Aの関係者以外にも広く門戸を開いている。活動が始まった頃は、農家のお嫁さんの割合の方が高かったが、現在の参加者の農家・非農家の割合は、半々くらいとなっている。

筆者が初めて「PIKAPIKAママくらぶ」を訪れた、平成22年当時の活動の様子を振り返ると、「布絵本作り」に熱中する若い母親たちのことが思い出される。

当時、筆者が行った参加者へのアンケート調査³の結果でも、母親たちにとってこの活動は、子育て仲間との交流の場であり、ここに来て講習を受けている間、子どもから少し離れて自分の時間を持てたことによって、安堵感や充実感を得られていることが明らかになっている。

そして近年、最初は第一子を連れて来ていた人が、今では第二子を連れて来たり、子どもの就園を機に母親だけで来る継続的な参加者がみられるようになってきた。このような動向からは、この活動が地域の子育て中の「母親同士の交流と学びの場」として定着していることを窺い知ることができる。

再び筆者が今年度一年を通して活動を調査し、参加者同士の関わり合いを見てきた中で、この活動が子どもの成長をお互いによるこび合い、育児などの苦労を語り合う場となっていた。

特に農家のお嫁さんにとっては、農業後継者世代にしか共有できない悩みや理想を語り合い、支え合うことのできる仲間との出会いの場としての機能を有していることが確認できた。

また、非農家の母親たちの多くは、この活動に参加するまでJ Aに足を踏み入れたことがなかったが、「PIKAPIKAママくらぶ」の活動を通してJ A、そしてJ A女性部の活動というものを知る機会につながっていた。

（2）信頼関係の構築から新たな展開へ

「PIKAPIKAママくらぶ」の活動を牽引しているJ Aみどりの女性部のメンバーたちにこの取組みへの参加の動機について訊ねると、最も多かったのは「J A関係者からの誘い」という回答であったが、個別には「子育て支援に興味があった」、「地域の役に立ちたい」といった類の答えも多くあった。また、J A女性部のメンバーは、自分が子育てをしていた時に比べ、社会的には子育て支援の環境や制度が整いつつあるが、「地域に子どもが少なくなった」ことをあげ、子育て中の親子の孤立に対する問題意識を持っている。

原田ら（2001）⁴の調査結果においても、新興住宅地よりも農村地域に居住している母親は話し相手が少なく、孤立傾向が高くなっており、そのことが乳幼児期の子どもの言語・社会性などの発達にまで及ぶことを指摘している。このことから、農村地域における子育ての孤立化の解消につながる支援の重

3 J A全国女性協・J A全中『J A子育て支援活動実践事例集』平成23年3月作成に伴うアンケート調査

4 原田正文・服部祥子（2001）『乳幼児の心身発達と環境－大阪レポートと精神医学的視点－』名古屋大学出版会、P150～P152

要性を窺い知ることができる。

このような地域の事情に鑑み運営メンバーは、発足から現在までの5年間、参加希望者を分け隔てなく快く迎え、適度な距離感を保ちながらこの活動を通して母親同士の交流や学び、そして子どもの成長をあたたかい目で見守り続けてきた。

今年度、筆者が行った母親たちへのヒアリングでは「ここに来るとホッとする」、「スタッフがとても優しいので親子で毎回楽しみにしている」、「子どもの名前をしっかりと覚えてくれて呼びかけてくれるのがうれしい」、「他の子育て支援にも行ってみたが、自分はここが一番好きなので来ている」、「JA女性部の手作りおやつがいつも楽しみ」、「夫の転勤で転居したが、ここに来たくて車で一時間以上かけて通っている」などの意見が寄せられた。

このような意見は、1年目のヒアリングの段階では聞くことのできなかつたものであり、5年もの間、活動を継続してきたことで参加者とJA女性部のメンバーの間に信頼関係が構築されたことを示しているといえよう。

そのことを裏付けるように、「PIKAPIKAママくらぶ」の参加者たちにJA女性部への加入を呼びかけたところ、現在の参加者全員(14名)⁵が加入したという。これは、子育て支援を入口にして地域の若い母親たちに交流と学びの場を提供し、同じ地域で暮らす子育て経験者として集まって来た若い母親たちのサポートを続けてきたことが信頼を生み、JAに新たな人的つながりを生んだ結果であると

いえよう。

5. JA女性部に加入するまでの道のり —TEMを用いた分析から—

これまでJAみどりの涌谷支店で実施している「PIKAPIKAママくらぶ」の活動が、JA女性部の新たな仲間づくりにつながった事例について述べてきた。

ここでは、農家に嫁いだ若い世代の女性が、活動に参加することによって、JA女性部への加入にどのように動機づけされたのか。その変容プロセスを分析し、JAの子育て支援の意義について考察していく。

なお、本調査に関しては、植草学園大学発達教育学部の小川晶 専任講師の協力のもと、半構造化インタビューデータの取得および「複線経路・等至性モデル (TEM)」^{テム}の手法を用いた分析を行った。

(1) 調査の目的

他県から専業農家に嫁いだ一人の女性が、JA女性部の加入や活動への参加を主体的に果たしているというケースを丁寧に分析することで、JAの子育て支援の有効性を明らかにするとともに、JAの子育て支援を新たなJAの仲間づくりにつなげていくモデル形成に寄与する。

(2) 調査の方法

図表3の内容で半構造化インタビューを実施した。

インタビューには、他県から農家に嫁い

5 平成26年12月現在

(図表3) インタビューの詳細

インタビューイ	Aさん	年齢：30代 子ども：長男、長女、第三子妊娠中 当該農家の「跡取り」である「長男」と結婚。農家の「跡取り」であるということを知らずに夫と交際。 結婚前は幼児教育関係の正規職員として関東地方の地元で勤務していた。専業主婦、2世帯同居家庭で育つ。
	Bさん	Aさんの夫 年齢：30代 「農家の長男」
	Cさん	Bさんの母親 Aさんの義母であり「姑」
	Dさん	J A女性部において活動のリーダー的存在
インタビュアー	植草学園発達教育学部・小川晶専任講師 J A共済総研・福田	
インタビューの時間、期間、場所	90分程度／回×3回（Aさん以外は1回） 平成26年4月～平成26年10月 Aさんの地元にて実施	
インタビュー項目	・結婚について ・農業について ・子育てについて ・「PIKAPIKA ママくらぶ」での活動について ・その他	

だAさんと、Aさんの生活や子育てに深く関係している人を選出した。

Aさんは、J Aみどりの涌谷支店の「PIKAPIKAママくらぶ」での活動に参加している。結婚、新たな家族、転居先での関係構築、出産、子育てといった女性のライフイベントに加え、「農家の嫁」という固有性を持つこと、またインタビューへの協力を得られたことが選出の理由である。

(3) 分析方法

「複線経路・等至性モデル (TEM)」(サトウ2009) を用いて以下の手順で分析した。

①逐語録化されたインタビューデータを文意のまとまりごとに切片化した。その結果、355枚のカードが作成された。

②これらのカードをAさんの心理状態の変容プロセスに沿って時系列的に配列し、「始点」と「終点」を設定した。

③配列されたカードを分類し、類似内容をまとめたカード群にラベルを付して抽象度を

上げるとともに、ラベル（カード群）同士を結ぶことでネットワーク化を試みた。

④Aさんの変容プロセスにおいて、「等至点」「分岐点」「必須通過点」「社会的方向付け」「社会的ガイダンス」など、ポイントとなる点を見出すとともに、Aさんの行動に関係していると思われる周囲の背景要因について検討した。

⑤Aさんの変容を第Ⅰ期から第Ⅴ期に時期区分した。

⑥TEM図として完成させ、Aさんの変容プロセスについて分析した。

(4) 「複線経路・等至性モデル (TEM)」を用いる意義

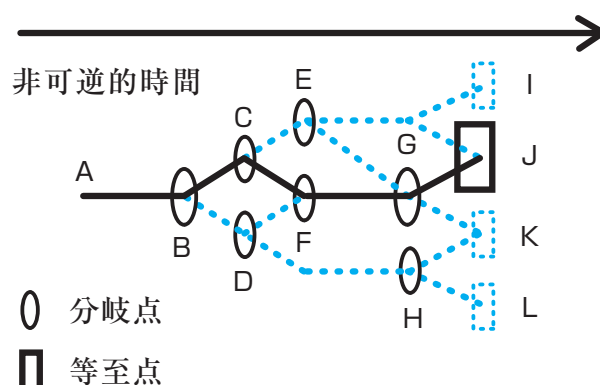
質的研究では、人間のLife(命・生活・人生) (サトウ2012) について、それを要素に分けたり測定したりせず、その意味を包括的な視点から丁寧に記述することができる。多くの心理学の研究は、人間の内部に変数を仮定し、変数と変数の関係を記述することで研

究を成就する。人間のLife全体的な理解などはほぼ無視されており、時間的な経緯もほとんど考えられていない（安田 2005）。

一方TEMは、等至性（Equifinality）の概念を文化心理学や発達心理学に取り入れようとしたValsiner（2001）の創案に基づく。個々人がそれぞれ多様な径路を辿っていたとしても、等しく到達するポイント（等至点）があるという考え方を基本とし（安田 2005前出）、人間の発達や人生径路の多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みモデルである。図表4の等至点（Equifinality Point：EFP）は収束するポイントとして、分岐点（Bifurcation Point：BFP）は分岐するポイントとして描かれる。非可逆的時間（Irreversible Time）とは、時間の持続を示す概念である。他の概念に、必須通過点（Obligatory Passage Point：OPP）がある。必須通過点は、ほとんどの人が、論理的・制度的・慣習的・結果的に経験せざるを得ないポイントとして示される（サトウ 2009前出）。

今回の分析において、農家に「嫁いだ」A

（図表4）TEM図



さんが、「PIKAPIKAママくらぶ」と出会い活動していくことで、J A女性部の会員として所属感や活動の安定感を得ていくこと、「農家の嫁」や「ママ」としてのアイデンティティを形成していく変容を基軸に、TEM図（農家に「嫁いだ」Aさんの変容プロセス）を描いた。大きなライフイベントを経験しながら、家族や農業との関係性、「PIKAPIKAママくらぶ」の活動、ママ友や支えてくれる人たちとの交流などがどのようにAさんの行動選択につながっているかを可視化する試みでもある。

（図表5）インタビューへの説明内容

1. 研究の概要	・本研究の目的や方法、本調査の分析方法についての説明 ・インタビューが受ける利益と不利益 - 利益：今後の子育て支援事業の展開に有効な示唆となりえる - 不利益：時間的拘束を負うがインタビューの意思により短縮や中止、データの削除が可能であり、短縮や中止、データの削除にあたってインタビューの不利益は発生しない
2. インフォームド consent	・同意書による
3. 資料の匿名化	・連結可能匿名化 ・匿名化する時点：インタビューデータの逐語録化、加工を施す
4. 分析結果の開示	・原則として開示する
5. 資料の保存	・研究終了後、すべて廃棄する ・廃棄方法：シュレッダー処理、データの復元不可能処理
6. 研究成果	・公開方法：一般社団法人JA共済総合研究所『共済総研究』vol.70 福田 研究員・研究報告に掲載 ・研究成果の公開の際には個人情報保護される

(5) 倫理的配慮

インタビューに際し、インタビューイに対してインタビューの内容とインタビューデータの取り扱いについて図表5の内容で説明を行い、同意書による意思確認を行った。

(6) TEMの理論を構成する基本概念

TEMの理論を構成する基本概念の説明及び本調査結果における意味を以下の図表6に示す。

(7) 分析結果とTEM図

Aさんの変容プロセスを第Ⅰ期～第Ⅴ期に

分け分析した結果およびインタビューデータをもとに作成したTEM図は、次頁以降の図表7-1～7-5のとおりである。

なお、TEM図内では、「PIKAPIKAママくらぶ」を「ピカピカ」と表すこととする。

1) 第Ⅰ期「お嫁さんになる」

[分析結果]

Aさんの変容プロセスを、農家に「嫁ぐ」という結婚の形や農業に携わるといった、これまでに経験したことのないライフイベントが現実味を帯びてきた時点に着目して、スタートを「結婚を考える」とした。「結婚」(OPP

(図表6) TEMの理論を構成する基本概念

基本理念	内容	本研究における意味
社会的方向付け：SD (Social Direction)	他の選択肢があるにも関わらず、特定の選択肢を選ぶように仕向けられる環境要因と、文化社会的圧力。	価値観や農家に対するイメージなど、Aさんが影響を受けている認識や周囲の慣習など。実際に嫁ぎ先での生活を体験したり、結婚後の家族としての生活が開始されたりすることで変容し、Aさんが行動を選択する際に影響している。「PIKAPIKA ママくらぶ」での活動やママ友との関係、義母との関係性の変容、出産や子育てなどを経るなかでAさんの行動選択に影響を与えているものも変容している。
社会的ガイダンス：SG (Social guidance)	他の選択肢があるにも関わらず、特定の選択肢を選ぶように働く援助的な力、行動を後押しする認識や認識。SDとSGは同じ事象であっても圧力にもなり援助にもなる。	抵抗感がありながらしたがってきた価値観や慣習が、Aさんの行動を下支えする力に変容することもある。「農家の嫁」として形成された考え方や生活の仕方をそれまでの自分と調和させたり調整させたりすることでSDからSGとしてAさんが行動選択する際の方向付けとなっていく。
必須通過点：OPP (Obligatory Passage Point)	ある地点からある地点に移動するために、多くの人がほぼ必然的に通らなければならない地点。	ここでは、OPP 1を「結婚」とした。結婚という行動の選択がAさんの「農家のお嫁さん」としての必須である。さらにOPP 2を「義母と同士「お嫁さん」アイデンティティ」とした。これもその後のAさんの変容には必須である。
分岐点：BFP (Bifurcation Point)	ある経験において転機となる状態や、実現可能な複数の経路が用意される状態の結節点。	妊娠したことや「長男」を出産したことにより、Aさんは家族に意思を表明していく。また、「PIKAPIKA ママくらぶ」の活動は「ママ」であることで得た出会いであり、Aさんにとって「妊娠と「長男」出産」は分岐点となっている。
等至点：EFP (Equifinality Point)	研究者が研究目的に基づいて焦点を当てた、等しく至る点。	J A女性部への新規加入への動機のみならず、J A女性部の活動を継続させていくためのキーとなる「子育て支援サークル運営のリーダーとしての自覚」を等至点に設定した。AさんにとってJ A女性部の活動の持続は内的な目的ではない。しかし、「PIKAPIKA ママくらぶ」の活動での充実感とその認識はJ A女性部の活動の持続を導くものである。

1)に至るまでのAさんは、[農家のイメージ] (SD1) や実母からの「本当にやっていけるか確かめてからにしないさい」(SD3) といったアドバイスから感じ取る不安感だけでなく、Bさんとの結婚について、[結婚をやめたら後悔する] (SG3) という思い、Bさんの「30前に継がないと技術的にきつくなる」(SD6)、[農家を継ぐ、いやなら別れる] (SD5) といった考えにも方向づけられている。そのようななか、[祖母の死] (SG7) により、Bさんが実家である農家を継ぐことと結婚が必然性を帯びてくる。

Aさんは実母のアドバイスもあって実際にBさんの実家に泊まり、「嫁ぐ」ことを見極める期間を設けている。しかし、それはAさんにとって「足を運んだら結婚すると思った」(SD4) という圧力となっており、覚悟の上での行動であった。

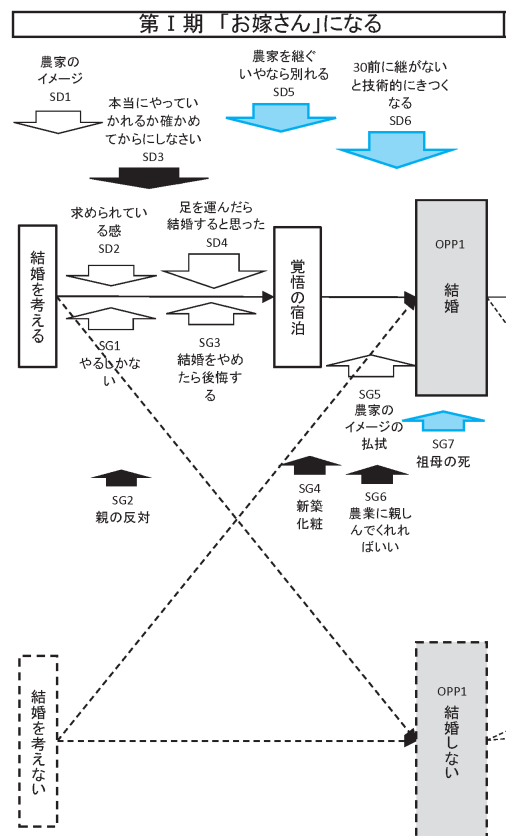
Aさんの結婚の決断を方向づけているものはそれだけでなく、[新築] (SG4) された住環境、義母が「化粧」(SG4) をしていること、[農家のイメージの払拭] (SG5) がある。また、義母の「農業に親しんでくれればいい」(SG6) という穏やかなアプローチを好意的に捉えており、結婚についての迷いが薄らぐ下支えとなっている。

2) 第Ⅱ期 「長男」出産

[分析結果]

実際に「お嫁さん」の生活が始まると、想像以上にAさんは苦しくなる。「人に会えない、人が恋しい」(SD6)、[近くに友達がない] (SD8) といったこれまで感じたことのない孤独さに、「帰りたい」と何度も

(図表7-1) TEM図

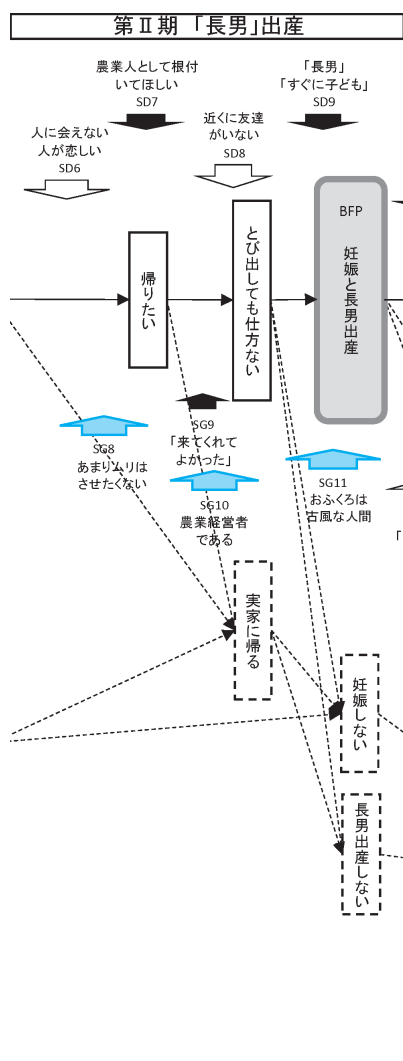


小川 晶 作成

思う。しかしAさんが「とび出しても仕方ない」と思いとどまるのを支えたのは、義母の「来てくれてよかった」(SG9)であった。また、夫の「あまりムリはさせたくない」(SG8)、[農業経営者である] (SG10)、[おふくろは古風な人間] (SG11) という考え方であった。

やがて「妊娠と「長男」出産」(BFP)により、Aさんの嫁ぎ先での立場が変容する。妊娠や長男の出産がなければ、Aさんの嫁ぎ先での居場所や立場、「農家の嫁」としての

(図表7-2) TEM図



小川 晶 作成

生活は現在とは大きく異なることが予測されることから、また、これを機にAさんの裁量や自分らしさの追求といったものへの選択肢が広がることから、「妊娠と「長男」出産」(BFP)が分岐点であることが分かる。

「農家の嫁」であるAさんにとって、妊娠(子どもを産める可能性があること)や「長男」の出産は非常に大きなライフイベントであった。

3) 第Ⅲ期 義母への労いと信頼

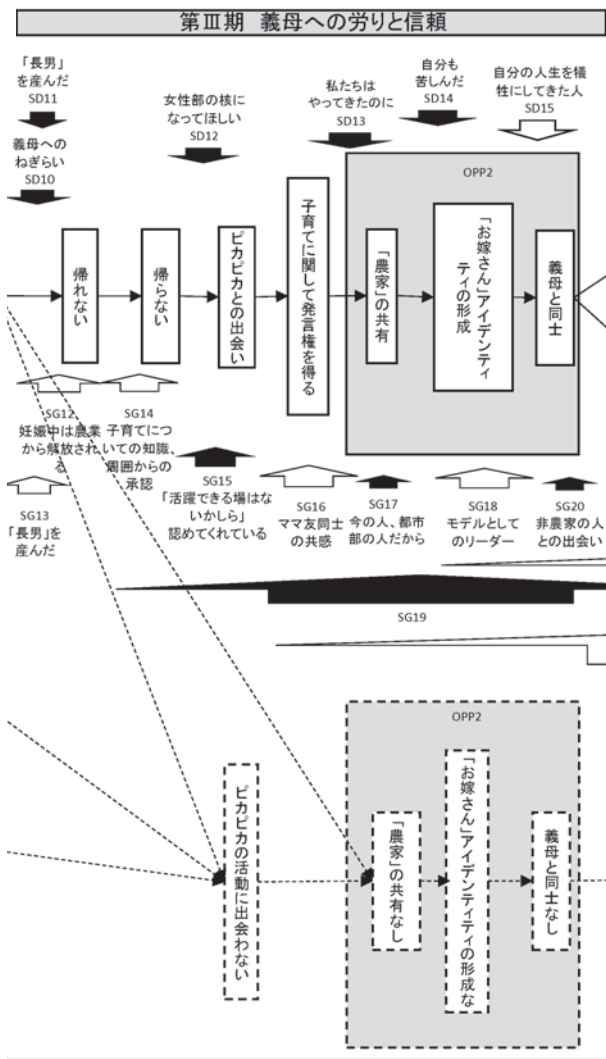
[分析結果]

この時期、Aさんは実家に帰りたいたいと思いつながらも「帰らない」という選択に至る。これまでの葛藤と異なり、内的な価値として帰らないことを選択したのである。農家の「「長男」を産んだ」(SD11)という慣習による解釈に違和感を覚えながらも、「「長男」を産んだ」(SG13)ことで得たものも確かである。家族内での発言権を得たこともその一つであろう。子育て中は農業から離れて家事労働が中心になることで得たゆとりや理想の専業主婦に近づいたこともまた、その一つである。さらに、子どもにかかわる仕事をしてきたAさんの子育ての様子は、周囲から承認され、Aさんの存在は農家の「お嫁さん」だけではない側面を持ち始める。

この時期Aさんは「PIKAPIKAママくらぶ」との出会いを得る。義母が提案したのであり(「活躍できる場はないかしら」、認めてくれている」(SG15))、この提案と展開される活動に参加することで得る充実感が、Aさんの義母への信頼感の強化につながっている。

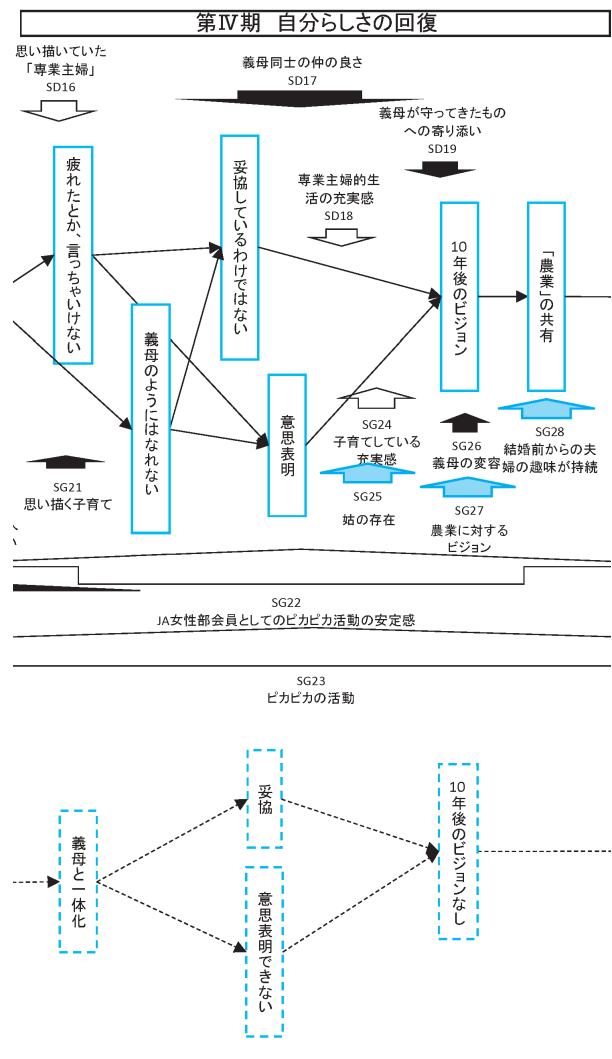
さらに、義母のこの提案は、Aさんに義母の「お嫁さん」としてのかつての苦悩を彷彿させ、「姑」の自身の経験とAさんの価値観を認めようとすることで生じる葛藤に気付くきっかけとなっている。「自分たちはがまんしてやってきた」、という事実と、Aさんの実態とを比較し、「今の人、都市部の人だから」(SG17)という理由づけをして気持ちを収めようとする義母の葛藤が読み取れる。この葛藤や義母の苦しみをすることで、Aさ

(図表7-3) TEM図



小川 晶 作成

(図表7-4) TEM図



小川 晶 作成

んははじめて[「農家」の共有](OPP 2)が「姑」との間で実現し、[「お嫁さん」アイデンティティの形成](OPP 2)がなされ、[「お嫁さん」同士であるという「義母と同士」(OPP 2)の感覚を得る。

4) 第Ⅳ期 自分らしさの回復

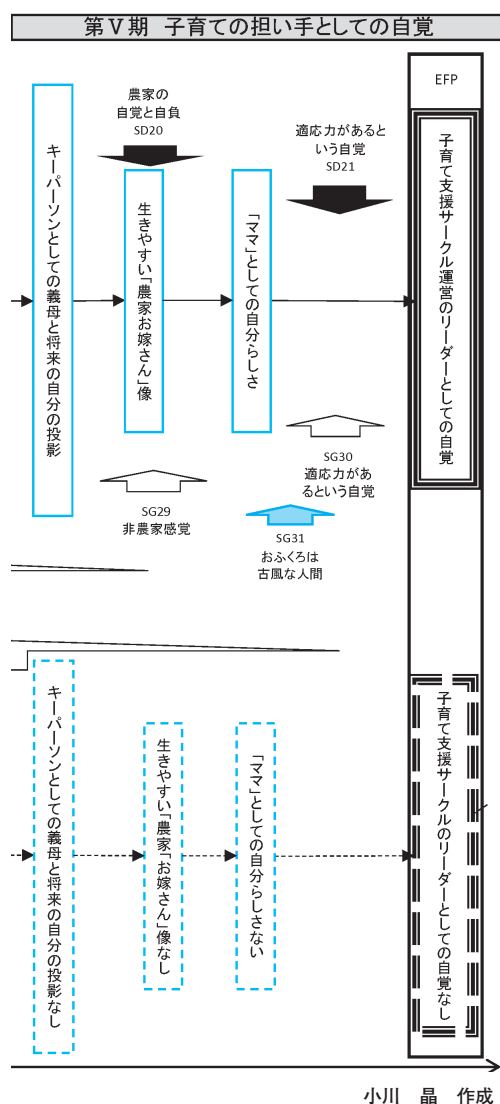
[分析結果]

[「義母と同士」]感覚を得たAさんは、「嫁」として「嫁ぎ」、農家の生活をしてきた義母への労いが生じ、「疲れたとか、言っちゃい

けない」と思うようになる。そして「義母のようににはなれない」と思いつつも、「農家の嫁」であることを受け入れつつあり、「妥協しているわけではない」という葛藤した感情を持つ。また、出産した「長男」を「農家の長男」としてではなく、一人の子どもとして育てていく「意思表示」を義母にしている。

「長男」を出産したことでもたらされた家事労働を中心とした生活は、Aさんが「思い描いていた「専業主婦」(SD16)でいられる生活であった。加えて、「PIKAPIKA

(図表7-5) TEM図



ママくらぶ」の活動」(SG23)での自分が描く「ママ」でいられる充実感に支えられて、Aさんは自分らしさを回復していく。このことにより、Aさんの義母に対する行動の変容「義母が守ってきたものへの寄り添い」(SD19)が導かれている。

これらのことが条件として備わったうえで、[専業主婦的生活の充実感](SD18)や、[義母の変容](SG26)、夫の農家や農業に対する考え方、「姑」の存在(SG25)、[農業に対するビジョン](SG27)、[JA女性

部会員としての「PIKAPIKAママくらぶ活動の安定感」](SG22)により、Aさんは「10年後のビジョン」を描くようになった。さらに、結婚する前からの夫との共通した趣味があり、それを発展させるという意味が夫婦間にあったことに支えられて、Aさんは農家での自分の立ち位置や価値を見出し、「[農業]の共有」が可能となった。

5) 第Ⅴ期 子育て支援サークル運営のリーダーとしての自覚

[分析結果]

自分らしく「農家の嫁」であることや子育てをすることを見出したAさんは、義母をキーパーソンとして自分の将来に投影するようになる（「キーパーソンとしての義母と将来の自分の投影」）。

義母のようになることを求められているように感じ、義母のようにはできないと感じたりすることから解放され、義母を農家に生きる一つのモデルとして価値づけたうえで、「生きやすい「農家のお嫁さん」像」を抱いている。このお嫁さん像は、「農家の自覚と自負」(SD20)がありながらも、「非農家感覚」(SG29)が下支えとなり得たイメージである。

やがてAさんは「子育て支援サークル運営のリーダーとしての自覚」(EFP)を得るわけだが、このプロセスには、JA女性部への帰属や「PIKAPIKAママくらぶ」の活動がAさんらしく子育てをすることをサポートしたことで「[ママ]としての自分らしさ」を得たことが影響している。

出産や子育てを通して、また子育てをサポートしてくれる活動を経て、Aさんは農家に

「嫁いで」からずっと求められてきた適応することに対しても、慣習から求められる適応力やそれに応えることができるという自覚によって自分を導こうとし（「適応力があるという自覚」（S D21））、また、適応力があるという自信によって自らを支えていく（「適応力があるという自覚」（S G30））ことで、[子育て支援サークル運営のリーダーとしての自覚]（EFP）を得た。

（８）考察

以上の分析結果を踏まえ、AさんがJ A女性部への加入の動機づけとなった要素について考察していく。

Aさんが「PIKAPIKAママくらぶ」の取組みを通してJ A女性部の活動に理解を示すことができた背景には、

- ①子育てをする自分への肯定感の取得
- ②非農家の女性との交流
- ③自分らしい農家のお嫁さんの確立
- ④姑との信頼関係の構築
- ⑤自己実現の場

といった点が、深く関与していることが考えられる。

他県の子農家から、専業農家に嫁いできた女性にとって、知らない土地での農家のお嫁さんとしてのアイデンティティ形成をはじめ、これまでとは異なる習慣に合わせて価値形成していくことは容易ではないことが推測できる。しかし、Aさんが自分らしさを失わずにポジティブに農家や農業に親しみ、姑と関係を構築することができたのは、自分らしい子育てができたことで得た肯定感であった。

出産・子育てという女性にとって価値観が

変容しやすい時期に、J A女性部員が牽引するこの活動に参加することを通してJ A女性部員たちが自分の子育てを応援してくれていることを知り、そこで出会った農家や非農家のJ A女性部員や子育て仲間との交流や支え合いは、Aさんにとっての新たな農家のお嫁さん像の形成に有効であった。特に農家や農業から少し離れた価値観を持つ非農家の女性たちとの出会いが、Aさんを農家や農業に近づけることに関与している点は非常に興味深い。

また、「PIKAPIKAママくらぶ」にAさんを導いたのは姑であることも重要なポイントである。かつては姑自身もお嫁さんとしての葛藤を経験しているからこそ、Aさんの生き方を尊重し、結婚前の仕事や価値観をはじめ、子育てに関しても理解や評価を示している。これに対してAさんからも姑に対する労いや信頼感が生まれ、お互いに相手の生き方を尊重するという関係構築につながっている。

そして、非農家出身のAさんにとってこの活動が、自己実現に有効であったのは、この活動がAさんの結婚前のキャリア（幼児教育関係）を発揮できる場であり、家族から認知されているJ Aのフォーマルな活動であることが大きく影響している。

Aさんが「PIKAPIKAママくらぶ」の活動を通して、J A女性部の活動に価値を見出すことがなければ、そしてそれがAさんの内的な価値でなければ、参加者のリーダー的な存在として、意欲的に活動しようという意思を持つことはなかったであろう。また、農業者の団体であるJ AやJ A女性部というバックボーンに支えられることで得られた安定感

や信頼感が、農家のお嫁さんであることの価値をもたらすとともに、AさんをJA女性部の帰属へ導いたといえよう。

(9) 本調査の限界と課題

今回の調査において、インタビューイがAさん一人に限定されたことは、調査の条件や調査協力上の限界であるが、農家に「嫁いだ」一人の女性の経験を丁寧に読み解くことは、同様の背景や環境を持つ女性にとってひとつのモデルになり得るだけでなく、農業後継者世代をサポートする際の視点や方法を導き出すことに有効であると考ええる。

6. JAの子育て支援活動と新たな仲間づくりの効果と課題

現在、地域の中には行政をはじめNPO法人や生協などの様々な担い手による子育て支援が行われている。このような状況の中、これからJAが子育て支援に参画する際に求められるのは、既存の子育て支援とは異なる、農村・農家の状況を知るJAの独自性であると考ええる。

今回の調査対象である「PIKAPIKAママくらぶ」の活動の起源は、「孤立しがちな農家のお嫁さんの子育て仲間づくり」というJA女性部員ならではの発想によるものであり、地域の子育て支援の取組みの中で他にはないJAの独自性を発揮している。

具体的には、本研究の調査の中でも「出かけづらさ」をはじめとする農家の伝統的で保守的ともいえる文化の存在が、現代においても農家のお嫁さんたちの葛藤や懸念の原因となっていることが明らかになったが、本稿3

(2) で述べたとおり、JAが実施することで家族からの理解を得られやすいなどの効果が確認できた。

また、プログラムの中での収穫体験や料理教室において発揮されるJAならではの独自性や豊かな裁量に触れることで、非農家の女性にとって農業やJAの良さを体験する機会となるとともに、農家の女性にとってはその価値を再認識することにつながっている。

そして、行政などによる一般的な子育て支援のように子どもの年齢などによる参加期限等を設けず、子どもが大きくなったら母親単独で参加し続けることを奨励している点は注目すべきポイントである。そこには、子育て仲間との交流や学びを得るためにJAに集まった地域の母親たちにそのまま末永くJAに親しんでもらい、JA女性部員として活動してもらいたいという意図がある。

このようにして一般的な子育て支援とは異なる自由な発想を持つことも、子育て支援を入口にした新たな仲間づくりには必要であり、JAやJA女性組織の活性化につなげていく上での主要な課題のひとつであると考ええる。

7. おわりに

今春から施行される「子ども・子育て支援新制度」の根拠法である子ども・子育て関連3法の主なポイントのひとつに、「地域の実情に応じた子育て支援」があげられている。そして、そこでは、地域子育て支援拠点をはじめとする「地域子ども・子育て支援事業」の充実が謳われている。

また、国や自治体の施策の議論でも、地域

子育て支援を地域の活動として様々な担い手によって行ってもらうことが理想的な形として描かれている。子育て支援のニーズは、地域によって様々である。特に都市部と農村部では必要な支援の内容も異なるため、地域の事情を把握することは非常に重要である。

J Aグループにおいても、第26回 J A大会の決議で、今後の J Aの目指す姿の実現に向けて提示された戦略のひとつである「地域くらし戦略」において、支店等を拠点に組合員・地域住民のくらしのニーズに応え、J Aくらしの活動や地域事業を通じて地域コミュニティの活性化を目指すこととしている。

そして、このような目的の背景には、J Aの組合員の高齢化や、世代交代に伴う組合員の減少という実態があり、地域の次世代層との接点を強化していくことが大きな課題となっている。

J Aは、保育施設のような子育てに関する専門性を持っているわけではないが、農業者の団体として極めて強い地域密着性があり、人的・物的ネットワーク資源を持っている。これから J Aが子育て支援に参画していく場合には、まずはこれらを活用して地域の実情を把握するなどして子育て支援のニーズの掘り起こしを行うとともに、先行する子育て支援とは異なる J Aならではの特色を持つことも必要であろう。

J Aの子育て支援は、単に地域の親子に農業の価値を伝えることや、交流の場を提供するといった一方的なものでなく、地域の若い世代と J Aがつながりを持つきっかけとなる場でもある。そして、それが将来に向けた地域農業への理解や J A事業の周知など、J Aの

新たな基盤となる可能性を秘めた大変意義のある取組みであると考ええる。

謝 辞

本稿の執筆に際し、J Aみどりの涌谷支店の千葉支店長、同 J A女性部涌谷支部の木村支部長をはじめ、「PIKAPIKAママくらぶ」に関係する皆様に多大なるご協力をいただいた。

また、本稿第5節における「J A女性部に加入するまで－TEMを用いた分析－」に関しては、インタビューへの協力を快諾して下さったAさんとそのご家族に感謝し上げる。また、植草学園発達教育学部の小川晶先生には、インタビューデータの取得から分析まで全面的にご協力をいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

参考文献

- ・内藤考至（2004）『農村の結婚と結婚難 女性の結婚観・農業観の社会学的研究』九州大学出版会
- ・農政ジャーナリストの会（1993）『変わるか、農業・農村と女性 日本農業の動き』農林統計協会
- ・J A全国女性組織協議会 全国農業協同組合中央会（2011）『J A子育て支援活動 実践事例集』
- ・松原康雄 山縣文治 編著（2007）『児童福祉論』ミネルヴァ書房
- ・原田正文（2006）『子育ての変貌と次世代育成支援－兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防』名古屋大学出版会
- ・牧野桂一（2012）「保育現場における子育て支援と保護者支援のあり方」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』7、pp.179－191、筑紫女学園大学
- ・牧野桂一（2012）「自己肯定感とは何か：総合的・実践的研究をめざして」『子どもの権利研究』21、pp.118－126
- ・森田明美（2011）「子ども・家庭分野の現状を踏まえた新たな取り組み－八千代市母子自立支援プログラムを中心に」『地域におけるつながり・見守りのかたち』中央法規
- ・森田明美（2011）『よくわかる女性と福祉』ミネルヴァ書房
- ・永田真理子・仲道由紀・野口ゆかり・平田伸子（2012）「産後1ヵ月時・4ヵ月時の・母親の育児生活肯定的感情に影響する要因」『母性衛生』53（2）、pp.329－336、日本母性衛生学会
- ・小川晶（2013）「保育士の母親支援における母親の肯定感と養育態度の改善との・関係」『植草学園大学紀要』第5巻 pp.17－23、植草学園大学

- ・小川晶（2011）「保育園における高学歴・高齢初産母子に対する支援－母親と保育者の関係構築を基軸として－」『保育学研究』第49巻第1号、pp.51－62、日本保育学会
- ・大西由希子・良村貞子（1997）「伝統的母性観の影響下における母親の育児観－母親役割期待に関する調査から－」『北海道大学医療技術短期大学部紀要』9、pp. 1－12、北海道大学医療技術短期大学
- ・大沢真知子（2006）『ワークライフバランス社会へ』岩波書店
- ・太田仁（2010）「親の援助要請態度に関する実証的・実践的研究」『関西大学社会学部紀要』42巻、pp.27－47、関西大学
- ・野々山久弥（1992）『家族福祉の視点』ミネルヴァ書房
- ・無藤隆他（2008）『子育て支援の心理学』有斐閣
- ・齋藤英二（2002）『心の病気』西東社
- ・斎藤学（1989）『家族依存症 仕事中毒から過食まで』誠信書房
- ・サトウタツヤ（2009）『TEMではじめる質的研究－時間とプロセスを扱う研究をめざして』誠信書房
- ・佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則（1994）「育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連」『心理学研究』64（6）
- ・サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン＝ヴァルシナー（2006）「複線径路・等至性モデル－人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して」『質的心理学研究』5、pp.255－275
- ・サトウタツヤ・安田裕子・佐藤紀代子・荒川歩（2011）「インタビューからトランスビューへ－TEMの理念に基づく方法論の提案」『日本質的心理学会』第8 107
- ・安田裕子（2005）「不妊という経験を通じた自己の問い直し過程－治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から」『質的心理学研究』4、pp.201－226
- ・安田裕子・荒川歩・高田沙織・木戸彩恵・サトウタツヤ（2008）「未婚の若年女性の中絶経験－現実的制約と関係性の中で変化する、多様な径路に着目して」『質的心理学研究』7、pp.181－203
- ・安田裕子・サトウタツヤ編著（2012）『TEMでわかる人生の経路 質的研究の新展開』誠信書房
- ・福田いずみ（2013）「子育て支援から新たなJA仲間づくりへ～JAみどりの浦谷支店「PIKAPIKAママくらぶ」が目指すもの～」『共済総研レポート』No.132、JA共済総合研究所